

自己評価報告書

平成23年 4月13日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520232

研究課題名(和文)シェイクスピア劇の材源と改作に関する翻訳プロジェクト研究

研究課題名(英文) Translation Project and Studies on Sources and Adaptations of Shakespeare's Dramatic Works

研究代表者

大和 高行 (YAMATO TAKAYUKI)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：30253371

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：シェイクスピア劇、材源、改作、翻訳

1. 研究計画の概要

本研究は、シェイクスピア劇とその材源ならびに改作との比較研究において利便性の高い注釈付翻訳書の公刊を目指すことで、シェイクスピア研究の更なる発展にとって必要な基礎的資料を広く公に提供することを目的とするものである。本邦初訳を公刊することにより、英米で関心が高まっているシェイクスピア劇とその材源との関係を解明する研究ならびにシェイクスピアが後の時代にどのように受容されたかを解明する研究を、わが国においても大いに促進することができる。

2. 研究の進捗状況

平成20年度から平成22年度までの3年間の研究期間において、以下のような具体的な成果を得ることができている。

(1)平成20年度から平成22年度にかけて、研究代表者である鹿児島大学法文学部の大和高行が中心となり、シェイクスピア劇の材源と改作に関するテキストの拡充作業を進めた。

他方、鳴門教育大学大学院学校教育研究科の杉浦専任講師を編集担当者として、平成20年度においては、「ナルボンヌのジレット」の訳出ならびにシェイクスピアの『終わりよければすべてよし』との比較、平成21年度においては、訳の推敲ならびに注釈・解説を付す作業に当たった。

平成21年度においては、杉浦を編集担当者として、「ロミオとジュリエット」の訳出ならびにシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』との比較を行い、訳の推敲ならびに注釈・解説を付す作業に当たった。

また、平成21年度と平成22年度において、既に訳出済みであった『スコットランド人ソーニイ』について、大和を編集担当者として、

訳の推敲ならびに注釈・解説を付す作業に当たった。

平成22年度においては、シェイクスピアの『リチャード3世』の改作として知られる、コリー・シバーの『リチャード3世』の訳出を進めた。

(2)成果の公表については、大和による「John Lacy, *Sauny the Scot* (1667) にみる新たな喜劇性——イングランド、スコットランド、そして「インド」——」『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』第69号(2009), pp. 25-39、鹿児島国際大学国際文化学部の小林教授による「監禁と解放の劇場——『乙女の悲劇』のダブルプロット構造の再検討」『英文学研究支部統合号』(日本英文学会)、第3巻(2011), pp. 459-472頁、大和を中心とする「ジョン・レイシー作『スコットランド人ソーニイ』論」『鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要 地域政策科学研究』第7巻(2010), pp. 19-86、杉浦を中心とする「ウィリアム・ペインター作「ナルボンヌのジレット」論」『鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要 地域政策科学研究』第6巻(2009), pp. 109-132、「ウィリアム・ペインター作「ロミオとジュリエット」論——翻訳と解説」『鳴門教育大学研究紀要』第26巻(2011), pp. 258-286頁の公刊の他、大和と小林と鹿児島大学教育学部の丹羽佐紀准教授が、本翻訳プロジェクト研究の副産物となる英国王政復古期演劇、英国ルネサンス演劇に関する学会発表を行った。

(3)当該プロジェクトメンバーは、月に1度の頻度で大和研究室において例会を開き、それぞれの持ち回り担当箇所を翻訳を、つぶさに検討してきた。訳出作業では、訳は正確か、日本語表現として十分にこなれていて、台詞

としての通りがいいか、などの点に注意しながら、参加メンバー全員が忌憚のない意見を相互に出し合っている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
すなわち、協働(共同)研究上の連携を密に図りつつ、当初の予定通りの研究成果が得られている。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度となる本年度においては、コリー・シパーの『リチャード3世』の試訳原稿を研究分担者全員が参加する研究会で討議を経て練り上げると同時に、作品の注釈・解説を含めた編集作業を進める。また、日本英文学会九州支部大会のシンポジウムで研究成果を発表した上で、本課題の最終報告書を作成する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 小林潤司、「監禁と解放の劇場——『乙女の悲劇』のダブルプロット構造の再検討」『英文学研究支部統合号』(日本英文学会)、第3巻、2011年、459-472頁。査読有
- ② 大和高行、「コリー・シパー作『リチャード3世』におけるアン求愛の場面の劇作法」『鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要 地域政策科学研究』第8巻、2011年、211-226頁。査読有
- ③ 杉浦裕子・大和高行・小林潤司・山下孝子・丹羽佐紀、「ウィリアム・ペインター作「ロミオとジュリエッタ」論——翻訳と解説」『鳴門教育大学研究紀要』第26巻、2011年、258-286頁。査読無
- ④ 大和高行・小林潤司・杉浦裕子、「ジョン・レイシー作『スコットランド人ソーニイ』論」『鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要 地域政策科学研究』第7巻、2010年、19-86頁。査読有
- ⑤ 大和高行、「John Lacy, *Sauny the Scot* (1667) にみる新たな喜劇性——イングランド、スコットランド、そして「インド」——」『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』第69号、2009年 25-39頁。査読無
- ⑥ 杉浦裕子・大和高行・小林潤司・山下孝子・丹羽佐紀、「ウィリアム・ペインター作「ナルボンヌのジレット」論」『鹿児島大学大学院人文社会科学研究科紀要 地域政策科学研究』第6巻、2009年、109-132頁。査読有

〔学会発表〕(計3件)

- ① 小林潤司、「書評：Robert Brustein, *The Tainted Muse: Prejudice and Presumption in Shakespeare and His Time* (Yale UP, 2009)」関西シェイクスピア研究会例会、2010年12月12日、ホテルサニーストン(大阪市)。
- ② 丹羽佐紀、「『ロミオとジュリエッタ』におけるロレンス修道士と薬屋の関係をめぐって——二人の役割の同質性とその宗教的背景——」第49回シェイクスピア学会、2010年10月16日、福岡女学院大学(福岡市)。
- ③ 大和高行、「*Sauny the Scot* (1667) にみる新たな喜劇性について」、第47回シェイクスピア学会、2008年10月11日、岩手県立大学(盛岡市)。